駿河台地区副所長

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学情報科学センター 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井田, 正道 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/4307

〔副所長所見・駿河台地区〕

駿河台地区副所長・井田　正道

2004年5月より駿河台担当の副所長を拝命した。2002年度より2年間にわたって情報科学センター教育専門部会長として、情報教育の責任者をつとめたが、引き続き情報科学センターとのご縁が続くこととなった。

2002年よりスタッフ会等に出席してきたが、当初は情報科学センターの抱える議題の多さに驚愕し、ほとんど理解できないまま会議が進行していったことを思い出す。いまだに情報システムの問題をはじめ理解できていない領域も多く、副所長として私が適任なのかという自問もある。けれども、教育専門部会長の間に「今後の情報教育の運営に関するWG」などにも参加しており、情報教育の移行をみとどける責任は私にもあるのではないかと考え、副所長就任を勝手に納得している次第である。

教育専門部会長のときと異なる仕事に情報科学センター・アシスタントのリーダー会の開催がある。情報教育は大半の講座を兼任講師が担当し、多くのアシスタントの協力なしでは運営できない。したがって、センターの構成員としてリーダー・アシスタントと直接話し合う機会をもつことは非常に重要であり、アシスタントの意見を極力尊重しながら体制を整えて生きたいと考えている。さらに、リーダー会の議論を聞きながら情報教育について新しいアイディアを出せればとも思う。さらに次年度以降の良質なアシスタントの確保も課題として残されている。

今後の情報科学センターにはいわゆる「2006年問題」と「2008年問題」を抱えている。2006年問題とは、高校での情報教育が必修となった学生が入学してくる年であり、情報教育内容の抜本的な見直しが求められる。現状の認識では、新入生の全体的な底上げというよりも、入学時におけるコンピュータ・スキルの格差が拡大するのではないかといわれており、カリキュラムの見直しや従来のやり方とは違うクラス編成のあり方なども検討する必要がありそうだ。

2008年問題は、情報教育の学部への完全移行の問題である。完全移行は一気に行うというよりも段階的なプロセスを経ることになろう。徐々に学部にも情報教育のカリキュラムの策定などに関与してもらうようにしていきたい。また、各学部の情報教育に対するスタンスを考案してもらうことによって、大学全体の情報教育の質の向上につながればよいと考える。

この他、さまざまな難題があるが、他の部署では例をみない教職員の協働体制のもとで、2年間にわたっていわば同じ釜の飯を食うセンター・スタッフ同士のチームワークで乗り切っていきたいと思う。